

当館企画展

## ■ 加越能の美術

— 縄文から江戸時代までの名宝 —



重文「秋野時絵硯箱」五十嵐道甫

特別陳列

アメリカで活躍した日本人画家

### ■ 東典男の世界

— 宙に棲む淑女たち —

### ■ 秋の優品選 — 書跡を中心に —

- 主なコレクション展示
- ミュージアムレポート
- 行事案内
- 所蔵品紹介
- ミュージアムショップ通信

当館企画展

# 加越能の美術

— 縄文から江戸時代までの名宝 —

主催：石川県立美術館

共催：北國新聞社

後援：石川県教育委員会、富山県教育委員会、金沢市教育委員会、NHK金沢放送局、第23回全国健康福祉祭いしかわ大会実行委員会

9月11日(土)～10月24日(日) 会期中無休

1F企画展示室

## 学芸員の眼

仏教が新しい展開を見せると、その影響は地方にも現れてきました。神仏習合が進み、仏教が形を変えていくと、都はもろんで地方にあっても宗教美術が花開き、山岳信仰も盛んに行われるようになります。海や里から崇高な山々を望むと、自ずと山岳信仰の世界が生まれたものと思われれます。

戦国の時代、守護の台頭もあって地方の統治は、大きく変わりました。加賀には富樫氏、能登には畠山氏の台頭が見られます。さらに一向一揆を経て近世には前田家の支配下に入ります。ここで支配者はいくつもの領地に入ると、由緒ある寺社に文物の奉納を通して祈りを捧げました。領民の心よりどころである寺社に手厚い保護を与え、寺社を通して領民と深い関係を持つようになっていったのです。加賀では白山比咩神社、能登では妙成寺などに奉納された文物は、以降寺社の宝物とされ、価値の高い文化財として今日に伝えられています。

遠く古代にさかのぼれば、北陸の地は「越の国」とよばれ、越前、越中、越後の三国に分けられていました。その後、越前から加賀が、越中から能登が独立し、越中を加えた三国は地域的なまとまりをみせ、それはまた加賀藩政期、前田家の領地とも重なって「加越能」とされるようになりました。

本展はこの「加越能」の姿を、文化財、名宝を通して見てみようとするものです。日本海に面し、大陸ともつながる文化交流の中から、他の地域とは違った風土と文化が形作られ、つづく前田家の支配下では、京都や江戸にも匹敵する独特の文化が展開し、今日その伝統がこの地に息づいています。

今回の展示では「第一章 原始から古代—装飾の起源と宗教美術の広がり—」「第二章 中世—美術工芸と宗教美術の多様な展開—」「第三章 近世—加賀藩ゆかりの名宝と美術工芸王国の萌芽—」と章立てをしました。展示は縄文土器に始まり、古代中世の宗教美術を経て前田家のもとで「美術

工芸王国」とされる時代までの国宝・重要文化財を含む一五〇件で構成しています。そのうち第三章では企画展示室に加えて、二階「前田育徳会 尊経閣文庫分館」で前田家に伝わる文化財を公開します。

初めて公開される文化財、美術工芸品もあり、この機会を通して地域郷土に対する認識をいっそう深めていただければ幸いです。

※一部展示替をして十月五日(火)から後期展示が始まります。

観覧料	個人	団体
一般	一、〇〇〇円	八〇〇円
大学生	六〇〇円	五〇〇円
高・中・小生	三〇〇円	二〇〇円

※団体は二十名以上

当館友の会会員は団体料金



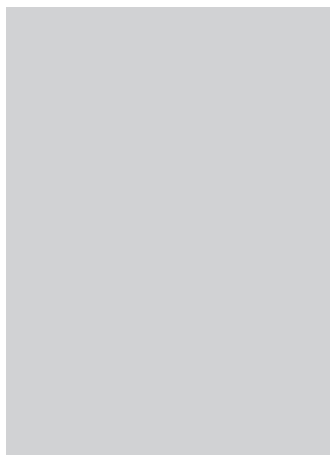
「銀象嵌水車文鐙」小市永政



「前田利常画像」那谷寺藏

## 学芸員の眼

前田家では、多くの書跡典籍が収集されています。そしてその貴重書を保存するための収納箱を作らせています。それは三重の箱に収められて、内箱は豪華な加賀蒔絵で作られています。内箱の制作には、京都や江戸から当時一流の蒔絵師である五十嵐道甫や清水九兵衛を当地に迎えて、そこに収まる貴重書、たとえば前田利常収集の国宝『土佐日記』がありますが、そうした名品にふさわしい内容の意匠が見事な蒔絵の技術で表現されており、その箱自体が作品といえるものです。このように、収集した名品が、育成した名品に収められるというスタイルに、前田家の収集品への熱い思いが伝わってきます。今回の展示作品から、そうした心を感じとっていただけることでしょうか。



「連時絵箱（職人歌合箱）」五十嵐道甫

「屏風蒔絵箱（国宝 土佐日記箱）」  
清水九兵衛

企画展「加越能の美術―縄文から江戸時代までの名宝―」の第三章近世の第二会場として開催するものです。

〈主な展示作品〉

天神画像

後水尾天皇御宸翰 忍

重文 荏柄天神縁起絵巻 中巻

重文 四季山水図屏風 伝周文

重文 四季花鳥図屏風 伝雪舟

達磨渡江図 狩野探幽

巖浪蒔絵真鳥羽筆筒 清水九兵衛

重文 大名物 茄子茶入 銘富士

大名物 肩衝茶入 銘浅茅

前田利常書状 小堀遠州勘返

玳皮蓋天目茶碗（梅花天目）

名物裂

後藤家装剣小道具

桑華字苑・桑華書志

重文 百工比照

## 加越能の美術

―縄文から江戸時代までの名宝―

## 加賀藩の美術工芸

9月11日(土)～10月24日(日) 会期中無休

前田育徳会  
尊經閣文庫分館

## 特別陳列

アメリカで活躍した日本人画家

# 東典男の世界

—宙に棲む淑女たち—

9月11日(土)~10月24日(日) 会期中無休

## 第4展示室

## 学芸員の眼

灰色の中の形象 (IMAGE IN THE GRAY)

一九六五年の十月に東京国立近代美術館で「在外日本作家展—ヨーロッパとアメリカ—」が開かれ、東氏の抽象作品「灰色の中の形象 (IMAGE IN THE GRAY)」が日本に初めて紹介されました。画面は白や鼠、黒、赤などの矩形が油絵具の特性である色層の厚みを伴って前後に重なるように組み合わされ、それらが灰色のバックに浮かびます。本来一品制作である油絵具とキャンバスを用いながら、複数制作のシルクスクリーン技法を用いて描かれているのです。

東氏は一九七四年以降、こうした抽象作品から裸婦へとテーマを移します。大きな転換のようですが、ザラツとしたバックと矩形の集合体とが両者同格という画面構成は、鮮やかな一色のバックと宙に浮かぶ裸婦とで構成される九十年代以降の作品に直結するものです。

シルクスクリーンとアート

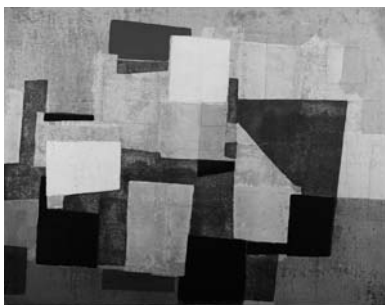
シルクスクリーンという版画技法を実際に手がけた人は少ないと思いますが、『プリントゴッコ』ならば、多くの人が体験しているでしょう。後者はシルクの派生系といえます。枠に貼られた絹に熱や光、溶剤で絵や模様を定着させ、インクをへらで刷り込むと、絹目のつぶれぐあいで、インクの透過量が変わるので、下の紙に絵や模様が描かれるというのがシルクスクリーンの原理です。

シルクスクリーン版画が美術作品として制作されるようになったのは一九五〇年代のアメリカといわれます。しかし、その評価は高くなく、一九六〇年に東氏がインクの替わりに油絵具を用いてキャンバス上に制作した『ウィンターNo.5』を、シアトル美術館の国際版画ビエンナーレに出

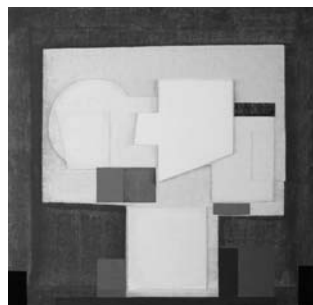
品する際には、出品を一度は拒否されました。当

時アメリカの美術展ではシルクスクリーンと写真は除くという一文が応募条件にあったのです。しかし、シルクの将来性を説いて、出品に漕ぎつけた『ウィンターNo.5』は、受賞し買い上げ作品となりました。その時、著名な評論家が作品を絶賛し、以後東氏の作品は全米の画廊から引きも切らぬ注文で、アトリエに籠もって制作に明け暮れ、たまに外に出ると、周りがすっかり変わっていたという今浦島のような話も生まれました。

東氏が独創し、芸術としての地歩を勝ち得たシルク作品は、油絵具の特性を生かし、色面の層の多重性により、不思議な奥行き間を醸し出します。ウォーホルやレイノボーカーの競覇かいぼうをはじめ、多くの画家が東氏の技法を学んだのでした。



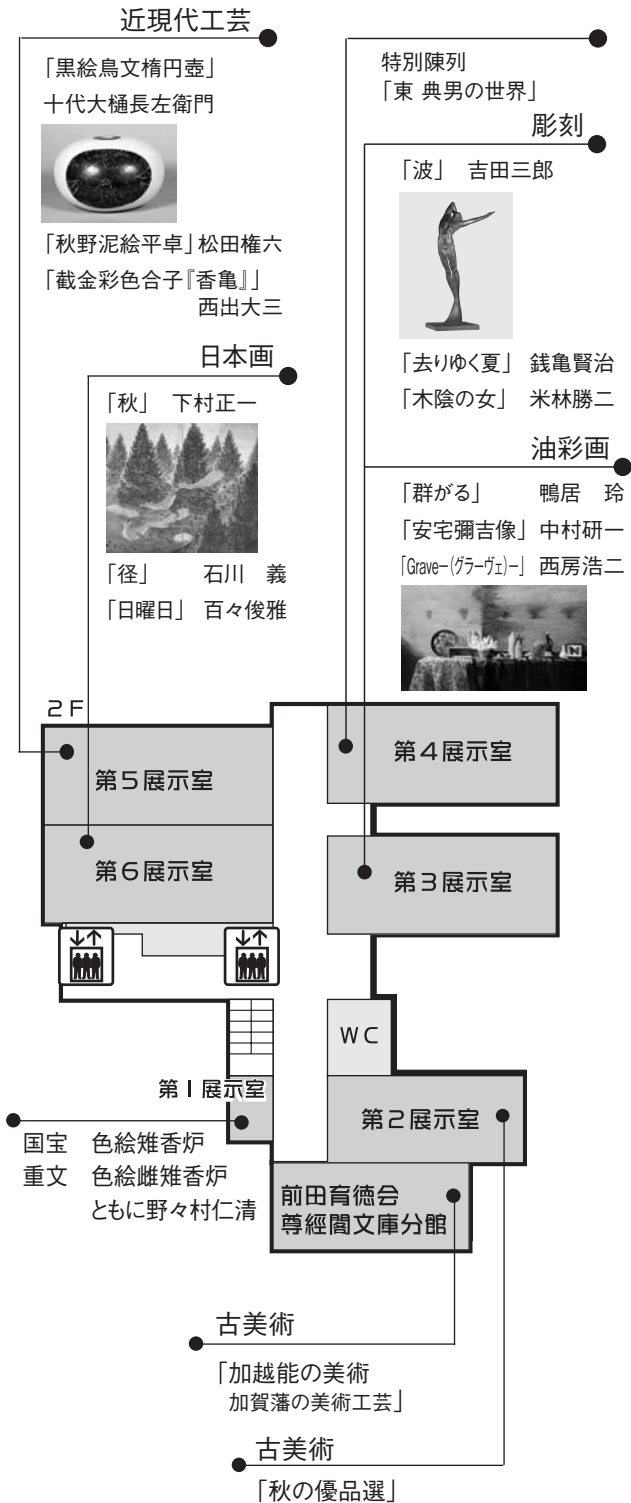
「IMAGE IN THE GRAY」1964



「INTERIOR」1969

# 主な展示作品

9月11日(土)～10月24日(日)  
会期中無休



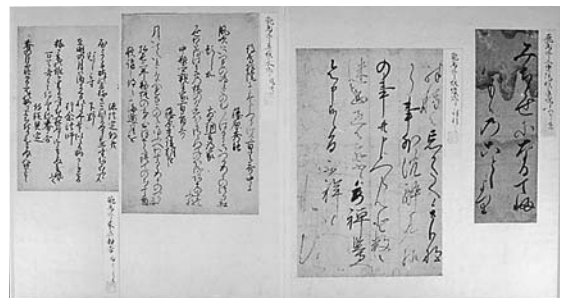
# 秋の優品選

—書跡を中心に—

9月11日(土)～10月24日(日)  
会期中無休

今回は、展示作品の中から石川県指定文化財《手鑑》を紹介します。桃山時代に入ってから古筆の愛好熱が急激に高まりをみせ、この風潮に呼応して古筆を網羅するために手鑑が作られるようになりました。この手鑑は、聖武天皇から始まり松花堂昭乗・小堀遠州と続き、天皇・親王・公卿・歌人・武将・連歌師等が体系的に配列され、奈良時代から江戸時代初期にかけての書を一望することができます。集録数二七四葉という量もさることながら、美術的・資料的にも貴重な手鑑です。山川美術財団から石川県立美術館に寄贈されましたが、財団を設立した山川家にはいった経緯について

ては未詳です。集録されている中では和歌関係が最も多く、経切などの仏書関係がそれに続きます。和歌では新古今集二十一葉、古今集十四葉、後撰集八葉で、他の手鑑に比べて新古今集と後撰集の集録が多い点が注目されます。また、しばしば当館の展示で紹介しているように、源氏物語の集録も十二葉あることも、この手鑑の大きな特徴です。成立年代も未詳ですが、江戸時代十七世紀末以降と考えられています。筆者、鑑定者、編集者、所蔵者の様々な思いが織りなす手鑑の世界を、この機会にご堪能ください。



県文「手鑑」奈良～江戸時代 8～17世紀

# 展覧会回顧

特別陳列

## 「徳田八十吉三代展」

会期：7月22日(木)～9月7日(火)

本展は、昨年八月二十六日に逝去された重要無形文化財保持者・三代徳田八十吉氏の一周忌を迎えるにあたり、三代の作品に初代、二代の作品を加え、九谷陶芸界を代表する徳田家の作風の変遷やそれぞれの優れた技をご覧いただくことを目的に企画しました。

第5展示室には、初代と二代の作品を中心に展示し、第6展示室は三代の作品でまとめました。今回の展示で特に気を遣ったのは三代の作品の照明です。色彩の微妙なグラデーションによる表現は、作品が大きいこともあって通常の天井からの蛍光灯による照明では、その色彩の輝きが十分に引き出せないと思われました。そこで壁面のガラスケース及びフロアの天井照明を消し、壁面に沿って走っている配線ダクトから作品一点につき二灯のスポット照明を試みました。展示室に入った瞬間は暗いと感じますが、個々の作品が幻想的に浮かび上がり、色彩の美しさがより引き立つ効果があったように思います。

また今回は、四代徳田八十吉さんをお願いして、会期中に二回ギャラリートークをしていただきました。いずれも多くの方が参加され、好評でした。お父さんである三代の作陶を中心に、プロジェクトで画像を映しながらのお話で、代表作の「黎明」は、

三代が釣りに出かけたときに見た朝日が昇る印象を表現したということや、「恒河」はイタリアのモダンアートの巨匠・フォンタナのキャンバスを切り裂いたような表現に触発され制作したということなど、興味深い内容でした。また、三代の作品は海外でも好評を博し、多くの人が感銘を受けたことに、美の表現を通して世界の様々な人々と心の交流が可能になるのではというご自身の想いも語られておりました。

今回の展覧会では、四代八十吉さんとはもとより、地元・小松の博物館を中心に多大な協力を賜りました。あらためてお礼申し上げますとともに、とりわけ猛暑が続いた今夏、当展覧会のため足をお運びいただきました皆様に、厚く感謝の意を表します。



四代徳田八十吉氏によるギャラリートーク風景  
(8月21日第6展示室において、画像を映しながら)

## 兼六園周辺文化の森 ミュージアムウィーク

十月の恒例行事、ミュージアムウィークが一日から八日の日程で今年も開かれます。美術館、歴史博物館、四高記念館など兼六園周辺文化の森の施設に、今年から新たにしいのき迎賓館も加わりました。十月一日から一帯はミュージアムの催し一色となります。

美術館では、三日に嶋崎館長による「加越能の美術」、八日には陶智子氏の「いつの時代も目はいのちー絵画に見る『目』の変遷」という二つの講演会が行われます。例年ホールで行われていたミュージアムコンサートは、今年も趣向を変えてロビーコンサートとなり、四日の午前と午後二回、マリンバの演奏があります。

この期間中には、能楽堂、伝統産業工芸館、21世紀美術館、中村記念美術館など、県も市も問わず、ミュージアムウィークならではの行事を開催します。いつもなら美術館か博物館か、どちらか一つだけなのでしようが、この機会にミュージアムの楽しさならぬミュージアム巡りを楽しんでみてください。



# ミュージアムレポート

キッズ☆プログラム

## 夏休み親子体験講座・鑑賞講座

この夏休みに行われましたキッズ☆プログラムをご紹介します。七月三十日、八月二・四日の三日間は、制作体験が行われました。一・二年生「チョキチョキ、ペタペタ色系アート」では、毛糸などの色系によるはり絵制作。三・四年生「見て見てキラキラ七宝焼」では、七宝焼のキーホルダー制作。五・六年生「日本画に挑戦!」では、ミニ色紙に日本画の絵の具で季節の



草花や野菜の絵を制作。どの講座でも親子で共に制作する時間をお楽しみ頂きながら、皆さんの力作が生まれました。

八月八日に行われた、「キッズ☆ふしぎハンター」は夏休み企画の展示室「ふしぎがいっぱい」の鑑賞講座です。参加した子どもたちには、作品のふしぎをさぐる「ふしぎハンター」の隊員になってもらいました。ふしぎをさぐるカード等の入った探検バックを片手に、アートゲームや学芸員との対話型鑑賞をしながら作品のふしぎを探ってもらいました。



## 十月の行事予定

■講演会	午後一時三〇分	美術館ホール	聴講無料
三日 (日)	「加越能の美術」		講師／嶋崎 丞当館館長
■土曜講座	午後一時三〇分	石川県立美術館講義室	聴講無料
九日 (土)	「加賀の文化 前田家伝来の名品(1)」		講師／高嶋清栄 学芸第二課長
十六日 (土)	「久隅守景と狩野派 加越能美術の二断面」		講師／村瀬博春 学芸専門員
二十三日 (土)	「加賀の文化 前田家伝来の名品(2)」		講師／高嶋清栄 学芸第二課長

## 次回の展覧会

会期／十月二十八日(木)～十一月二十八日(日)

前田育徳会 尊經閣文庫分館	「万葉集の世界 —平城遷都1300年—」
第2展示室	「曹洞宗の名刹 大乗寺の名宝」
第4展示室	「開光市展」
第6展示室	「系譜で見る近代日本画」

会期／十月二十九日(金)～十一月七日(日)

企画展示室	「第57回 日本伝統工芸展金沢展」
-------	----------------------

八月二十日には、昨年好評だったバックヤードツアー「うらがわ美術館」の二回目。今回は、対象学年を四年生以上に絞って実施しました。この活動に参加するに当たって、皆さんの大切な作品が保管されている美術館のうらがわを見ていただく活動ということで、守っていただきたい約束がいくつかありました。二時間近く美術館のあちらこちらを探検するような活動ですが、さすが四年生以上の高学年の皆さん、マナーを守って集中して参加してくれました。

猛暑といわれる連日の暑さの中、これらのキッズプログラムにご参加いただきましたありがとうございます。ありがとうございました。



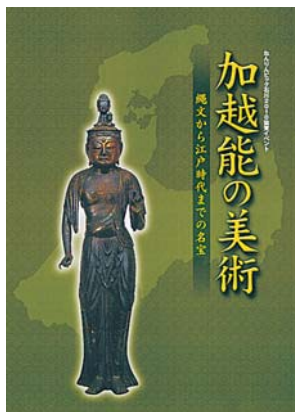
中野孝一 なかのこういち 昭和22年(1947)～



昭和53年(1978)  
幅14.0cm×奥行23.5cm  
×高さ17.3cm  
第25回日本伝統工芸展

作者は、江沼郡山中町(現・加賀市山中温泉)に生まれました。高校卒業後はまずデザインを学び、昭和四十二年東京デザイン研究所を卒業します。一時、広告会社に勤務しますが、四十四年に大場松魚氏に師事し、本格的に漆芸の道を歩み始めました。四十六年には日本伝統工芸展に初入選するとともに日本工芸会会長賞を受賞。以後、六十一年朝日新聞社賞、六十二年高松宮記念賞、平成三年保持者選賞受賞と、着実に漆の技を磨いていきます。そして十七年紫綬褒章を受章、二十二年に蒔絵で重要無形文化財保持者に認定されました。また、平成元年から石川県立輪島漆芸技術研修所で講師を務め、後進の育成にも尽力されています。

本作は、側面の扉の内部に三段の引き出しを納めた箱形の「小篋筒」です。扉、上面、裏の短側面と続く三面を中心に、りんどうや萩などの秋草が、蒔絵・卵殻・螺鈿を用いて表現されています。木地には檜材を用い、加飾の研出蒔絵には金粉・銀粉を使い分け、卵殻にはうすら、螺鈿には夜光貝を高度な技術であしらっています。中でも、比較的粗めの粉で、漆黒のなかに消え入るように描かれる秋草が、螺鈿や卵殻の白と対比され、深まる静かな秋の寂しさをたくみにとらえており、诗情あふれる作品となっています。作者は、このような草花などが国の豊かな自然をテーマにした表現から、近年は兎や栗鼠などの小動物に目を向け、生き生きとした躍動感にあふれる作風を展開しています。



「加越能の美術」展覧会図録  
A4判 定価二,〇〇〇円

縄文から江戸時代までの石川、富山の美を俯瞰する展覧会「加越能の美術」が好評開催中です。このように数々の文化財を一堂に展覧すると、改めて郷土の文化の懐深さを実感できます。これらをオールカラーで収めた図録が好評です。手元に置いておきたい一冊です。

## ミュージアム ショップ通信

### ご利用案内

#### コレクション展観覧料

一般 350円(280円)  
大学生 280円(220円)  
高校生以下 無料  
※( )内は団体料金

#### 10月の開館時間

午前9:30～午後6:00  
(2日・9日・16日・23日は  
午後7:00まで開館)

#### カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00

石川県立美術館だより 第324号  
2010年10月1日発行(毎月発行)

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号  
Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550  
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

10月の休館日は  
25日(月)～27日(水)です